



Title	ソ連邦における労働者農民出身者知識人の養成
Author(s)	ニーナ・ミトロファーノヴナ, カトゥーンツェヴァ
Citation	北海道大學教育學部紀要, 38, 51-59
Issue Date	1981-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29233
Type	departmental bulletin paper
File Information	38_P51-59.pdf



ソ連邦における労働者農民出身知識人の養成

ニーナ・ミトロファーノヴナ・カトゥーンツェヴァ

ПОДГОТОВКА В СССР ИНТЕЛЛИГЕНЦИИ ИЗ РАБОЧИХ И КРЕСТЬЯН

Нина Митрофановна КАТУНЦЕВА

ソンケイスル ミナサン!

まずはじめに、私は、日本への招聘にたいし、また、みなさんの前で話しをする栄誉を私に与えてくださったことに対して、日本学術振興会ならびに北海道大学の科学者の方々に心から感謝いたします。

私は、このことを、ソビエト国民への深い尊敬として、また、ソビエトの歴史、科学、文化への関心として評価いたします。

私の講演テーマは、「ソ連邦における労働者農民出身知識人の養成」でございます。

生まれて以来、60年間にわたり、とてつもなくきびしいたかひの道のりと妨害を克服してきたソ連邦は、有資格知識人、すなわち、国民の「精神的」勢力の養成事業において大きな成功を収めました。かれらの大部分は国の住民の大多数を占める労働者と農民の中から育ってきました。そして、いまや、労働者と農民、そして知識人の、ときはなしがたい同盟がソビエト社会の社会的基礎となっています。

現在、ソ連邦には、15万校以上の普通教育学校、6,500校の職業技術教育機関、4,300校の中等技術学校、860の高等教育機関があり、それらは国のほとんど250の諸都市にゆきわたっています。

あらゆる種類の教育機関に9千400万人のソビエト市民がおります。国の国民経済では、高等及び中等専門教育をうけた2千400万人の専門家が働いており、その中には125万3千人の研究者がふくまれています。1980年にむけて、高等、中等専門教育をうけた960万人の専門家を養成することが予定されています。

わが国で進行している住民の知識人化の道程は全面的な読み書き能力の義務的水準を不断に向上させる可能性をもたらしました。

今日すでに成長中の世代のために中等教育は義務化されています。かれらはあらゆる種類の教育を無償でうけることが保障されています。このことはソ連邦憲法に明記されています。

教育権は労働権と密接に結びつけられておりますが、その労働権には、募集、能力、職業準備、教育に応じて、また、ソビエト市民としての社会的必要を考慮しての職業選択の権利、及び仕事や作業の種類を選択する権利がふくまれています。これらの権利は、労働を保障することによって守られています。

ソ連邦は、専門家養成のテンポと水準にかんし、すでに大分前から、すべての国を追い越し、世界一になりました。さらに、宇宙の征服におけるソビエト科学の最初の大勝利にさいして、『ニューヨーク・タイムス』のハーリー・シュバルツは「科学研究の多くの重要な分野にお

いて、ソ連邦は第一級の職員とすべての必要な諸条件を有しており、それらは、世界の他の諸国、とりわけ、アメリカにあるものと、常に同じか、ときにはよりよいものであることは、ずっと以前から専門家には明らかであった」と書きました。上記の引用とは驚くべき対照をなしているのは、地球上における国民教育水準にかんする最新のユネスコの資料であります。この資料は、世界において、初等教育をうけているのはわずか、4人に1人であり、中等教育にいたっては12人に1人であることを証明しています。ドイツ連邦共和国〔西独〕やフランス、イギリスといった発達した資本主義国においても、若者のわずか、20~25%の、支配階級出身者が優先的に、総合大学で学ぶ権利を付与する教育をうけているにすぎません。

現在、ソ連邦に存在している教育制度は、直ちにでき上ったものではありません。文化革命のすべての構成要素、中でも、国民教育制度と知識人要員の養成問題は、ソビエト国家の日々の現実と密接に結びつけられていました。もし、ソビエト政権がその最初の日から、文化を広汎な大衆の財産とすることを呼びかけた文化革命の実現にとりかからなかったら、わが国における社会主義的改造は考えられませんでした。これは、もっとも重要かつ複雑な課題でした。というのは、革命のときまでロシアの住民の多くは文盲だったからです。ウラジミール・イリイチ・レーニンは、革命までほんの数年というときに、非哀をこめて「人民大衆が教育、光明、知識という点で、これほど略奪をうけている野蛮国—こういう国は、ヨーロッパでは、ロシア以外にひとつものこっていない」(レーニン、全集〔第5版〕、第23巻、127ページ)と語っています。

あらゆる改革の実現にとって初発要因となったのは、大十月社会主義革命の勝利でした。それは、その深さと規模において未だ見たこともないほどの国の文化的な復興を意味していました。何百年もの文化的負債を新しい社会は数10年間で償わなければならなかったのです。ソビエト知識人の最初の核は職業的革命家たちでしたが、かれらは、多面的で深い教養と高い文化を有し異彩をはなっていました。その数はとても少いものでした。最初のソビエト政府はかれらの双肩にかかっていました。天才的な思想家であり、かつ、実践家であったレーニンによってひきいられたこの政府は、秀れた知性の持ち主たちによって構成されました。著名なアメリカの作家ア・エル・ウィリアムスは、ロシアにおける十月革命の目撃者でしたが、うっとりとして、次のように書いています。「最初の人民委員会議〔政府〕は、もし、閣僚によって書かれた書物とかれらが自由に用いる言語の多さでおしはかるなら、その閣僚の文化と教養において、世界におけるあらゆる閣僚よりも高いものである。」自己の知識と才能を惜しげもなく人民に与えたこれらの人々は、かれらが古いものを打ち破り、実に大きな創造的活動をなしえたことを全世界に示しました。これらの人々は、新しいソビエト知識人の創出によってヒナ型の役目を果しました。

ソビエト知識人の形成は二つの道をとりました。第一の道は、古い専門家を引きつけ、社会主義建設の過程でかれらを再教育することです。つまり、資本のお雇い勢力から、人民の知的勢力に変えることです。新しい要員の創出という事業において、この道は決定的な役割を果たすことはできませんでした。といいますのは、旧体制からうけついで有資格知識人はきわめて少なかったからです。たとえば、1914年、1億5,920万人の人口を有したロシアにおいて高等教育を終えたものはわずか11万2千人を数えただけでした。ソビエト政権を無条件的に受け入れた知識人とならんで、知識人の一部は、敵の陣営や動揺分子の中に入っているのが判り、か

れらにたいして、プロレタリアートは本気で闘わねばなりませんでした。ソビエト政権は、労働への大衆の熱狂によって知識人たちの心をひきつけようとしたり、愛国心を呼びおこそうとしましたし、また、よりよい物質的条件をつくりだすことなどをしました。その後、若いソビエトの要員の増加の度合に応じて、知識人全体に占める古い専門家の比重は、次第に下ってきました。第二の道、それは労働者と農民、つまり、肉体労働に従事する人々、本来、読み書きができない人々で、革命後に権力を支持するようになり、社会主義建設を引受けた人々の中から、新しい要員を創りだすことでした。かれらの中からの知識人の補充は二つの傾向で行われました。〔一つは〕先進的な労働者と農民を国民経済の管理及び組織活動に直接抜擢する方策であり、これは、要員の原始的欠乏をいやすことができただけでした。その後、かれらの資質の向上が要求されました。実際、自前の専門的養成なしの「下から」の抜擢は、勤労者の著しい数を精神労働の人々の水準まで引上げたとはいえ、新しい要員を創出するうえで主導的ファクターとなることはできませんでした。それゆえ、ソビエト知識人形成の主要な方向となったのは、高等・中等専門教育機関において、多数の労働者及び農民の中から、科学的で教養ある専門家を養成することでした。このことは、はなはだしい時間と資金を必要とするものであり、国家は生れた数年間はそのことに、充分、力をさくことはできませんでした。

ソビエト政権は、はじめ、古い専門家や抜擢制度の利用という流れに立脚しながら、同時に教育機関における新しい要員の計画的養成を組織するというきわめて困難な活動を行いました。この教育機関は多数の知識人の補充を安定的に行い、知識人の量的、質的構成を標準化するものでした。要員養成の成果を上げるために、文盲撲滅運動を開始し、すべての国民教育制度、つまり、その低い段階から、高い資格を有する要員の基本的供給者である大学にいたるまでの根本的な再建がとくに重要視されました。移行期に固有なこの「再建」過程における光栄ある役割を負わされたのが、労農大学予備校（ラブファーク РАБФАК = Рабочий Факультет）でした。労農大学予備校は、アナトーリ・ヴァシリエヴィッチ・ルナチャールスキーの表現によれば、一種独特な消防の梯子として発生したのであり、その梯子は、高等教育機関の窓にかけられ、それによって、以前は知的な職業につく可能性を奪われていた労働者、農民の青年が高等教育へ昇ってゆくものであります。労農大学予備校は、ソ連邦における要員問題解決のカギでした。労農予備校は、資本主義から社会主義の移行期の年月に、その援助によって専門家養成の分野における主要な課題を解決する政治的道具でした。

労農大学予備校が課題としていたことは、第一に、すべての部門を指導しうる能力のある思想的献身的な知識人プロレタリアートの創出であり、第二に、その養成をもっとも短期間に保障することであり、第三に、社会主義建設と密接に結びつけられた新しい知識人を形成することでした。

労農大学予備校の協力によって、知識人の社会的構成が変えられ、知識人養成のテンポが促進され、実践家である社会主義者が創出されました。このことは、文化革命の発展を刺激し、ソ連邦における社会主義の勝利を早めました。移行期において、労農予備校のようなタイプの教育機関がなくては、要員問題を解決することは不可能だったにちがいません。

労農予備校は、その存在した年月のあいだ、ソビエト国家の現実の進行に制約をうけて複雑な発展の道をたどりしました。

1918年8月2日の布告によってプロレタリアートに与えられた高等教育機関へ優先的に入

学する権利のプロレタリアートによる実質的行使の問題は、新しいソビエトの知識人の創出の可能性がその解決にかかっている基本的な問題として、実生活そのものによって提起されました。この事情が労農予備校発生の直接的原因となっています。

最初の労農予備校は1919年2月2日に、モスクワ商科大学（現在のゲ・ヴェ・プレハーノフ名称経済大学）に附設して、ザムスクヴァレーチェの労働者のイニシャチーブによって開設されましたが、その労働者たちは、布告にもとづいて学生になり、かれらにとって入りやすい形での高等教育を要求していたのです。

1919年9月11日に教育人民委員部〔文部省〕は、ソビエト共和国のすべての大学に附属して労農大学予備校を設置する法令（CY.1919.No.45.443ページ）を採択しました。そして1920年9月には、「労農大学予備校についての」布告（CY.1920.No.8.381ページ）によって、法的に強化されました。

労農大学予備校は、プロレタリアートと勤労農民層出身の人々を高等教育機関での勉学のために、もっとも短期間に準備することを目的としていました。労農大学予備校へは、一定の生産経歴を有し、社会的組織から推薦された16才以上の年令の労働者と農民が採用されました。労農大学予備校には、高等教育機関のあらゆる管理機関に自己の代表を送る権利及び、主要学部と同等に実験室、研究室、教材を使用する権利が与えられました。就学期間は3年間とされ、のちに、4年間に延長されました。労農予備校への入学にさいしての要求は、はじめはあまり高いものではありませんでした。年々、国の勤労大衆の一般的文化的成長に応じて、それは高められました。

大学における最初の労農予備校の出現は、非常に印象の強いものでした。それは、「工作機械工場から」きた労働者たちでしたし、わらじばきでどてらを着て「すきをもった」農民たちでしたし、軍服用の外套を着て長靴をはいた兵士たちでした。かれらは、以前のブルジョアの小さっぱりした学生たちとはきわだったちがいをみせていました。

大学の「自治」をうちこわす労農予備校の発生は、反動的知識人の悪意にみちた反抗をひきおこしました。かれらは、大学内に「堀」をめぐらし、自己の階級的立場を強化しようとしていたプロレタリアートの学生たちと対峙しました。ここには、知的な仕事への特権をにぎり、肉体労働をする人々を科学に近づけさせまいとするブルジョア知識人たちの志向があらわれていました。戦時の複雑さも、反動勢力の反抗も、もはや、革命によって獲得した権利を行使し、大学の講堂で合法的な席を占めようとする労働者・農民学生を妨害することはできませんでした。

しかしながら、十月〔革命〕の勝利ののちに開始され、労農予備校のおかげで大学が首尾良く為し遂げた、この労働者、農民出身知識人の創出過程は、非常に複雑なものでしたし、移行期全体に長引くものとなりました。

労農大学予備校が出来て最初の10年間は、教育人民委員部の中に単一の統一されたセンターがあり、あらゆる高等教育機関のために候補生を養成しました。労農予備校の卒業生が、すでに、大学の学生数の、およそ、 $\frac{1}{3}$ に達しました。

ソビエト国家は、1930年から、いまや、はっきりと明示された専門性をもつ要員を求めている国民経済の改造の必要性に、高等、中等、専門学校の活動を近づけるよう改革に着手しました。諸部門の高等教育機関を、ついで、労農予備校をも、対応する経済機関や人民委員部に密

着させるようになりました。この改革は、送り出す専門家の数をふやし、かれらの専門性の向上を促進しました。

すべての戦線において、1930年代への端境で展開された社会主義の進撃、国民経済発展の第1次5ヶ年計画の課題の実現（1928—1933年）、さらに第2期5ヶ年計画（1933—1937年）は、再建期の要員問題を新しい段階に引き上げました。「再建期には技術が全てを決定する」のアピールがまずはじめに実現され、さらに、初期の段階で、「要員が全てを決定する」のスローガンがひきつづいて実行されました。問題の質的側面に重要な注意が向けられました。

第2期5ヶ年計画期に、国の高等教育機関は369,900人の専門家を送りだしました。そのうち、134,400人が技師であり、農業の分野には41,600人です。第1次5ヶ年計画と比較すると、高等教育を終えた専門家の卒業生が多くなりました。ソビエト国家は最初の2回の5ヶ年計画の年月に、50万人以上（詳しくは568,600人）の各分野の有資格専門家を得ることとなりました。この時期までに、ソビエト知識人のすでに、80—90%は労働者及び、農民層出身者となっており、すなわち、知識人の増大は、肉体労働者出身で基本的になされたのです。すでに、1940年、ソ連邦は、免許資格を有する技師の数では、アメリカ合衆国のおよそ2倍になっていましたし、世界で第一位となっていました。かくして、第2期5ヶ年計画末までにソ連邦の要員問題は基本的に解決され、要員の計画的養成は軌道にのりました。ソビエトの高等教育機関は専門家養成における国の要請を基本的に保障しました。そのさい、強調しておかねばならないことは、第1次及び第2次5ヶ年計画期の大学での成功にかんし、労働者及び農民の中から教育された補充定員を大学に送りこみ、また、社会主義的原則で活動を組織した点でも、労農予備校が積極的役割を果たしたということです。極度の知識欲と、はかりしれない熱意によって強められた驚くべき勤勉さとねばり強さだけが、労働者、農民が高等教育機関で立派に学習するために、また、もっとも短期間にほとんど不可能なことをなしとげるのを助けたということを特に強調しておかねばなりません。労農予備校は大学への淘汰を行う国家的、政治的武器でした。大学の定員補充の階級的原则は——それによって大学構成が調整されるわけですが——搾取階級の残りかすが国内で一掃される再建期の完成まで変ることなく実行されました。

1935年12月にソビエト政府は、高等教育機関へ入学する人にたいして社会的な経歴と結びつけられた制限をとり払うことが可能だと考えました。この条令は、社会主義の勝利を宣言した1936年の新しいソビエト憲法の中で確認されました。ソビエト社会の道徳的政治的統一の強化という条件のもとで、労農大学予備校のようなタイプの高等教育機関の定員補充の社会的テコの実現性は次第に失われてきました。

1938年、ソビエト政府は、大学の新しい規定を承認しましたが、それによって中等教育を終了した17才から35才未満のすべてのソ連邦の市民は、人種、民族、宗教のいかに拘らず、国のあらゆる高等教育機関へ入学するために優先権も制限もないとされました。1933、34学年から労農予備校網は減少しはじめ、1940年代のはじめに労農予備校は廃止されました。

専門家養成事業における全般的成果に留意し、かつ、労農予備校の役割を評価しつつ、ソ連邦のさまざまな諸民族の労働者と農民出身の要員創出における成果を示すことが必要でしょう。

革命前は、これらの諸民族の労働者、農民の多くは文盲であり、文字さえもっていませんでした。たとえば、読み書きできる人が1パーセント以下のところも、すなわち、タジック人

0.5%, キルギス人0.6%, ヤクートとトルクメン0.7%, プリヤート0.8%などもありました。北極の諸民族のあいだでは、読み書き出来る人は全く見い出せませんでした。状況はきわめて複雑でした。多くの民族にとって、大学への道は労農大学予備校が唯一の道でした。

はじめに、民族地域の労農予備校とロシア共和国内の分校が広く発展し、ついで、労農予備校網が連邦各共和国にも広がってゆきました。民族地域の労農予備校とその分校の特別な学習集団が別につくられたのは、多くの諸民族の代表者たちがロシア語を知らなかったり、あるいはほんの少ししかロシア語を習得していなかったり、また、ほんの低い普通教育の準備しか有していなかったという事情によるものです。かれらのためには学習期間は5年間とされました。はじめの頃は、教育をうける権利を行使したいと望んだ少数民族の主な学生グループは、中央アジア〔での学習〕を志向しましたが、しかし、1924年に、教育人民委員部がその調整を行い、大部分は、それぞれの民族の住んでいる所の近くに置かれた地域の労農予備校の方をめざすようになりました。全体として国の一般的文化水準の向上の度合に応じて、年々、文化の発展テンポの一層高まった民族地域において、連邦共和国での高等教育機関と労農予備校網がますます発展し、次第に、そこが、諸民族の要員養成の中心に変わってゆきました。

このような政策の結果、1941年はじめに、民族共和国では102,200人の技師と29,300人の農業専門家が働くようになりました。かれらの中の圧倒的多数は地方の民族の労働者農民層出身の卒業生たちでした。この時期までに、各共和国には、共和国の要求に応え、ソビエト人民に忠実で国際主義のきずなで固く結ばれた諸民族〔出身〕の要員が配置されるようになりました。現在、ソ連邦諸民族共和国の国民経済には、高等、中等専門教育を有する約540万人の人々が働いており、それらの人々のうち、大体、420万人は高等教育を有しております。これらの諸成果の大部分は、すでに、移行期における労農予備校の推進によってこそもたらされたものだということを特に述べておかねばなりません。

労農大学予備校は、その存在した年月に、大学での学習に向けて労働者、農民青年の著しい勢力を養成しました。再編成の後、すなわち、1930—1934年の間に労農予備校は、第1次5ヶ年計画期よりも、5倍以上もの卒業生を高等教育機関に送りこみました。そして、移行期の間に、労農予備校は、百万人以上ものそこで教育した者たちを国の高等教育機関へ渡しました。

この際、強調しておかなければならないことは、国民経済の主導的部分のための要員が養成された、主要な工業・技術系及び社会・経済系高等教育機関は、80~90%が労農予備校卒業生によって補充されたということです。こうして、まず何よりも、労農予備校のおかげで、大学のプロレタリア化が、この期間に成しとげられたのです。移行期の末には、ソ連邦の高等教育機関の学生のうち、労働者と農民の比率は、大体、学生の半になりました。それゆえ、労農予備校は、その社会的使命を果たしたといえましょう。

この時期に労農予備校は、労働者・農民を高等教育に養成するためのもっと短期の社会的学校としての第2の機能をも成しとげました。労農予備校生たちの中から有資格専門家を得るためには、はじめは労農予備校で、次いで高等教育機関での8~9年、ときに10年間のはりつめた勉強が必要でしたが、これは、労働者・農民青年にとって高等教育への最短距離の道でしたし、普通教育の準備の不足を充たすための学習を、最小限の負担で彼等に可能ならしめるものでした。これらの事情によって明らかにされることは、わが国において、専門家養成に関する集中的な活動が行われたにも拘らず、長い間プロレタリアートの専門家は非常に少なかった

ということです。1930年代の中ばになってようやく、増大した10年制学校網が大衆的規模で高等教育機関に定員を送るようになり、生産労働者のための夜間学校があらわれて、労農予備校がその準備教育の使命をそれらにゆずるようになりました。労農大学予備校を用いてのみ高等教育機関へ進むという労働経験をもつ勤労者の主なたまりはなくなってしまったからです。標準的な就学期間をもつ広汎な普通教育学校網の存在と、国における有資格専門家の充分な数の存在によって、新しい知識人養成の加速的テンポは必要なくなりました。

同時に、労農予備校は、その第3の機能をも成しとげました。労農予備校は、社会主義の実践と密接に結びつけられた新しい要員のための闘争におけるプロレタリアートの主要な道具でした。労働者と農民は工業と農業における勤労者であり、大学と実生活の分離を克服し、大学から古いスコラ哲学としきたりを駆逐しました。労農予備校は、学習の向上を実生活に向けて、社会主義建設の要求に向けて近づけるうえで大きな影響を与えました。労農予備校では、全てが、はじめてであり、新しい教授学習方法の探究が開始されました。この問題では誤りもあったとはいえ、ここでは、理論と実践との密接な結合がなされました。また、教授における思想性・教育者の指導目的と学生自身の自主活動の結合を保障する新しい進歩的学習方法が形成されました。

従って、労農大学予備校は、臨時の学校であり、独得な階級的教育機関であり、資本主義から社会主義への移行期に特有の学校でした。労農予備校は知識の習得への労働者と農民の不可避的なあこがれを実現しましたし、肉体労働をする人々と知識人を結合する巨大な協同組合でした。多数の指導的な共産党の活動家、ソビエト国家の活動家、生産企業や諸機関の指導者、研究者、同じく、技師、農学者、教育者等々が、多くの以前の労農予備校生の中から輩出しました。かれらは、ソ連邦における社会主義と共産主義の建設へ積極的に参加するソビエト知識人の黄金の資産となっています。

× × × × ×

現在、ソ連邦においては、壮大な共産主義建設プランとして表現された社会主義経済体制の優位性と、科学・技術革命の諸成果との組織的結合の展望が示されており、現代科学の成果を身につけた、ますます多くの、かつ資格ある専門家たちを求めています。このような要員の存在は、国の経済力の増強と科学技術のポテンシャルの増大に影響をもたらしています。このことは、また同じように、ソビエト社会の社会的構成の改善に影響を及ぼしています。上記の道程の前進は、ソ連邦憲法につぎのように記すことを可能としました。すなわち、「国家は、社会の社会的同質性の強化を、すなわち、都市と農村、精神労働と肉体労働の間に存在する階級的差異を絶滅することを、そしてソ連邦のすべての民族と民族体の接近と全面的発達とを可能とするであろう。」

現代の専門家に提起されている高い要求と結びついて、科学技術の進歩の刺激剤を標榜している大学の重要性は、新しい高い段階に達しました。今や、重要な課題となっているのは、高い普通教育の準備と実践的熟練を身につけた物質的生産の場からの大学受験生による、すなわち、労働者、農民青年による大学の急速な補充であります。

科学、技術革命の発展は、展望をもって思考する生産人を求めており、同様に、自己の専門に関して高等教育機関における有資格水準の向上へのかれらの渴望をたかめました。

1960年代はじめに、わが国において、下からのイニシャチーブによって一連の高等教育機

関や生産企業に附属して、将来、大学で学ぶために知識を補いたいと希望した、中等教育を有する労働者、生産勤務員のための学校があらわれるようになりました。これらの施設は自分で労農大学予備校と名づけるようになりました。

1960年代の労農予備校は、1969年8月20日付、ソ連邦共産党中央委員会とソ連邦閣僚会議の決定によって国の高等教育機関に附属して組織された補習科（Подготовительное отделение）の先駆者でした。補習科は、労働者、農村青年の普通教育水準を高めることと、大学に入学するためにかれらに必要な条件をつくりだすことを目的としました。補習科の大学入学の一般計画によりその卒業生の20%までは毎年、大学へ送る義務が補習科に課せられました。補習科は、また、他の道によって高等機関に採用される全体数を増加させました。

科学技術の進歩に対応してはじまった補習科の活動は、同じく、発展する科学技術の進歩の要求に対応した高等教育制度の改革と結びつけられました。補習科は、それが存在した期間、高等教育機関の一構成部分として高等教育制度に組織的に組み入れられました。最新の統計資料は、わが国の高等教育機関附属の補習科の数とその定員は増加しつづけていることを証明しています。もちろん、補習科の増加の規模は、今日、860を数えているソ連邦における高等教育機関のあり方に制約されています。補習科には、10万900人の聴講生がありますが、そのうち、ほぼ半分が工業労働者であり、残りがコルホーズ員の除隊兵士です。

補習科の創立は、経済と文化の全ての分野のための専門家養成の一層の完成を目的とした大学の再建にかんする国家的事業における一段階であります。物質的生産分野からよりよい中等学校卒業生を補習科を通して高等教育機関に選択すること、最新の技術的方法を教授過程と卒業後の学習にとり入れるための実習と実践は、有資格要員養成の新しい共産主義的形態をつくりだす統一的過程の一環であります。科学的情報量の増大によって触発されるこの過程の発達には、科学と技術の最新の傾向に関して、全面的に発達した専門家による国民経済と文化の需要を保障するための期間の短縮を可能とします。

今日でも補習科が、普通、労農大学予備校と随性で呼ばれていることと関連して、これら二つの施設が、原則的にはちがったものであるということをはっきりさせなければなりません。

補習科は、その社会的統一性が運動を促進する、発達した社会主義社会の所産であります。ところが一方、労農予備校は、過渡期の新しい知識人〔の形成〕をめざす闘いでのプロレタリアートの階級的武器であります。すなわち、〔補習〕科への入学に際しては、中等学校卒業者の社会的状態（出身者ではなくて）、が決定的要素の一つです。補習科へは、高等教育機関に入るために一定の準備が必要とされる中等教育を終えた生産従事者が採用されています。ところが労農予備校に入ってきたのは、非常に短い期間に、もっとも少い損失で、高等教育のプログラムを理解するため最小限の普通教育の準備を与えることを必要とした労働者、農民青年だったのです。

これらの〔二つの〕施設に共通していることは、生産にたずさわっているもっとも秀れた青年、ソビエト国家によって提起された課題の解決のために熱心で有能な青年を、社会的選択の方法によって大学に引寄せるといふことです。

ソ連邦における労農予備校建設の経験は国際的な意義をもっております。マルクス主義歴史家が世界的規模における資本主義から社会主義への移行の時代とみなしている現代にとって、

十月革命後、経済及び文化生活のあらゆる分野において、とくに、要員養成の分野において、新しい方法をはじめて築き上げてきたソビエト・ロシアの実例は、特に重要であります。ソ連邦の過渡期において、労働者、農民出身専門家創出の事業において決定的な役割を演じた労農予備校建設の経験は、社会主義共同体の諸国家にとって及び発展途上国にとって重要な意義を有していました。というのは、それらの国にとって提起された諸課題の実現のために、もっとも短期間に人民民主主義体制に忠実な自分たち自身の知識人を養成することが不可欠だったからです。この経験は、諸国の具体的歴史的条件にあわせて利用されています。この経験は、まず第一に、労農予備校のようなタイプは、施設をその中から未来の指導的要員を教育する要員の社会的選択のための政治的道具として利用するという観点から、それらの国々に導入されています。

こうして、労農予備校の助けによるソ連邦における人民的知識人要員養成の経験は、社会主義建設期にソビエト人民によって積まれた貴重な経験の構成部分であり、この経験は、自主的発展の可能性を獲得したあらゆる国々の勤労者の財産となりました。

私は、自分のささやかな学術活動の成果にふれた講演を終るにあたり、日本の科学者達がソ連邦の歴史、その対外・対内政策の諸問題の検討にもたらした鋭い学問的寄与について特に述べたいと思います。わが国では、日本の進歩的科学者、野々村氏、中西氏、柴田氏、同じく江口氏、斉藤氏等の名はよく知られています。

もちろん、ソ連邦における知識人の形成と国民教育問題の研究者としての私にとっても、上杉氏や岩田氏他の諸労作は興味あるものです。クループスカヤにかんする立派な本が関啓子氏、石井郁子氏の二人の科学者によって出版されました。

とくに、私は、私の友人である、北海道大学竹田正直氏の国民教育及び教育学の歴史にかんする、また、労農予備校に関する貴重な諸労作を特記したいと思います。竹田氏は世界的な規模での資本主義から社会主義への移行期にとって労農予備校は不可欠な施設であるという私の観点と合致する結論に自主的に到達しました。

最後にご静聴を感謝いたします。私は、私のささやかな研究が私たち科学者の間の学術交流の強化の事業に役立つことを願っております。

これらの交流は日本とソ連邦の国民の間の友好強化を促進するでありましょう。

ゴセイチョウ アリガトウゴザイマシタ。

〔竹田正直 訳, Переводчик: Масанао ТАКЭДА〕